

令和4年度ココロねっこフォーラム～地域で取り組む子どもの居場所～（要旨）

令和4年11月21日(月)13:30～16:00

●パネリスト

飯笹 芳子さん 女の都小学校区放課後子ども教室 コーディネーター（長崎市）

元小学校教諭で、当時の同僚の先生方が集まり、2011年から学習支援と外遊びの放課後子ども教室を始める。開始当初は女の都小学校区子どもを守るネットワーク代表として活動の立ち上げに尽力。自治会役員なども歴任し、地域で子どもを育てる取組に関わっている。

藤原 浩美さん 子ども支援ネットワーク With Wind 代表（福岡県宗像市）

子どもがたくましく育つ環境モデルとして、2008年に「おなかたプレーパーク」を立ち上げる。子育て支援活動に関わる多数の資格を取得し、30年以上子どもの成長にかかわる活動を続けてきた。「まちじゅうを子どもの遊び場に」をモットーに子どもが生きやすいまちづくりを目指して現在も活動中。

蓮見 直子さん 独立行政法人国立諫早青少年自然の家 所長

国立山口徳地青少年自然の家、国立青少年教育振興機構総務企画部調査・広報課長、青少年教育研究センター企画室長、国立那須甲子青少年自然の家次長を経て現職。NEAL主任講師（全国体験活動指導者認定委員会自然体験活動部会が資格認定する自然体験活動指導者 NATURE EXPERIENCE ACTIVITY LEADER）。

●趣旨説明 宮本 幸成 長崎県青少年育成県民会議 事務局長

●司 会 音なき 由紀子 長崎県こども未来課 指導主事

●主な発言

主旨説明

宮本氏 昨年度も「子どもの居場所」をテーマでフォーラムを開催。今年は地域の実践活動（遊び体験）を中心に取り上げて本日お集りの皆さんと考えていきたい。

【第1部】

パネリストによる活動紹介等

藤原氏 自分の子育てや看護師をしていてヒトの育ちに大切なことをずっと考えていた。2005年にノーバディーズパーフェクト「完璧な親なんていない」という親支援プログラムに出会い、そこでヒトの育ちに最も必要なのは「あるがままの姿を認めてもらえる安全・安心な居場所が誰にとっても必要なんだ」ということを学んだ。



藤原氏

ヒトを育てるには親子の関係性がとても大事で、親の健康が大事であることを知った。どうやったら親子が健康に過ごせるかを考え、ママ友に声をかけて2008年におなかたプレーパークを立ち上げた。外で遊ぶだけで自律神経が整い、体幹がしっかりするなどを

感じられる。ヒトは動物なんだなと実感した。

日本の子どもの自己肯定感がなぜ低いのか。大人が子どもの居場所を奪っていないか。結果として大人にとって都合のいい子→自分自身を生きていないのでは？

R3年度 10~24歳 男子 1,260人、女子 784人計 2,044人が自殺。毎日、5~6人が自殺している。

子ども自身がありのままの自分を受け入れることが大切。

プレーパークが様々な子どもの居場所になってくれればいい。

現在、年間約 100 日開催。出張開催も合わせると年間 150 日開催している。

**音なぎ(司会)** スタッフの確保は？

**藤原氏** 声をかけたら誰かがいる。子育て中のママでも我が子と一緒にスタッフとして参加している。

**音なぎ(司会)** プレーパークの他にも、「ご近所みちあそび」というイベントをされているそうですが？

**藤原氏** 私が住んでいる地区の日の里で「日の里ご近所みちあそび」を実施している。

「ご近所」というのが大事。同じ地区の人と一緒に遊んで顔見知りになる。道路を 180m ほど車両通行止めにして、昔遊びやチョークでのお絵かきなど道路で思い切り楽しむイベント。炬燵を持ってくる人や、ヨーヨー釣りをしたいという人がいてそれぞれがやりたいことを道路を使ってやるという感じ。日の里地区に小学校 2 校、中学校 1 校あるが各校の校長先生も参加し長縄跳びをして子どもたちは大喜び。これまで年 1 回実施して 4 回目を先月実施。来年 5 回目は駅前通りを封鎖してみたい。いろんな人が関わってくれるようになり、広がりが出てきた。

**飯笹氏** 「子どもたちの体力が落ちている」と地域の小学校長からの相談で、体力・学力

アップを目標に 2011 年から放課後子ども教室を立ち上げた。地域の中で子どもたちが育まれる環境を作りたいと始めた。

様々なプログラムの教室を作ったが、当初は学校内実施だったため、すぐに教師のところにいく子どもたちがいて、逆に教師の負担増になるという声もあった。また、教師と地域の大人への子どもたちの態度が違ったりしたが今では、家庭でも学校でも話せない悩みを打ち明けてくれるようになった。



飯笹氏

今では「子どもが活躍できる行事を地域でやろう！学校・家庭でできないことを地域でやろう！」という意識がだんだんと高まってきたと思う。また、地域のつながりもできてきたと思う。

保護者の方や先生方から、「お世話になっています」と言っただけのはうれしいが、私は、地域の宝の子どもを一生懸命育てていらっしゃる保護者や学校に感謝している。同じように思っている地域の方も増えてきて、保護者、学校、地域がお互いに感謝し合っていることが大切だと思う。

**蓮見氏** 国立青少年振興機構では全国 28 カ所の青少年施設があり、「体験の風をおこそう」と多様な体験活動を提供している。自身は団地っ子として育ち、当時は「エースをねらえごっこ」などやって膝に擦り傷の絶えない子どもだった。

今日は「子どもの居場所」がテーマだが、ご参加のみなさんがイメージしている子どもの居場所とはどんなところか。私たちが子どものころは近所で遊んだり、群れて遊んだり、居場所という言葉もなかったと思う。

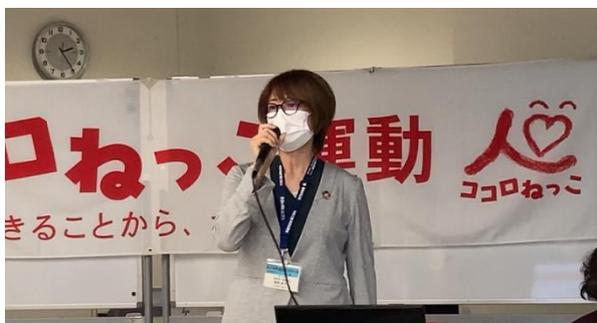
ここで3分ほど時間をとるので少し近くの方と居場所について話してほしい。  
～参加者が近くの方と3分間のPKT（ペチャクチャタイム）～

**蓮見氏** 現在は大人が設定しないと子どもの遊び場がないという状況も見受けられる。

改めて子どもから見た場と人の関わりを考えてみたい。子ども教室、プレーパークは日常的で比較的近所、校区でやっていること。つまり子どもが自力で行ける。対して自然の家や旅行などは、非日常で子どもが自力で行けないところと考えられる。他者の関わりを考えると、子どもが自力で行けるところは友達や地域の顔見知りが多い。自力でいけないところは知らない人たちという見方できる。

自然の家は子どもたちにとっては非日常であるが、自然の家だからできる体験がある。自然の家の職員は、参加者の気づきを引き出すお手伝いが仕事。

様々な“体験する”ことが子どもの育ちにつながる。



蓮見氏

それでは体験するとはどういうことか。体験は活動や行動することだけでなく、その活動を通して得られる感情や気づき、学びを含むいわゆる「体験の質」が大切。加えて、自分が体験することだけでなく、他者からの働きかけも体験も含まれる。

体験を構成する要素として環境も大切。親や先生、近所の人とのかかわりも重要。子どものまわりにいる大人は場を提供するだけでなく、温かく見守り、励まし、時には叱ったり、本気で子どもを受け止め関わり、認め合うことが子どもの心の栄養となる。

子どもを真ん中に考える。

子どもにとっての「居場所」とはどのようなところか、どんな気持ちになるところか。是非、子どもと一緒に考えてほしい。

## 【第2部】

### PKT（ペチャクチャタイム）5分間

子どもの居場所における子どもとの向き合い方について普段感じていることなど。



### 会場からの質問・意見

**A氏** 現在の子どもの居場所にはおとなの目、親の目がかかっている。昔は自分たちでクリエイトした。子どもだけの居場所ってあるのだろうか？

**藤原氏** 子ども自身が居場所だと思える場所。大人は場所を提供してその場所で子どもは自由に何をやってもいいと…、あまりにも大人の監視が厳しすぎる。ご近所みちあそびでは子どもに指示したがる大人に制限をかけるのが主催者の役割。

**B氏** 子ども教室は長崎市からの助成で担い手も確保。しかし、学校の放課後の一コマになっている。

また、自然体験活動をやっているが場所に山奥だったりするので車でやってくるとなると来れる人が限られる。子どもが自由に通える場所でプレーパークをやってみたい。ぜひ行政と協働事業としてやりたい。

**C氏** 女の都の子ども教室を見学した。この活動を他の地域にも広めたい。また、道路の貸切等についてはいろんなところと連携して考えていきたい。

**D氏** 自身でプレーパークを作ったが、もしものための傷害保険料だけでもかなりの負担となる。プレーパークをちゃんとした「仕事」とすることがこの活動を続けるための方法の一つではないか。またそうすることで人の確保もできるのではないか。

最近では、プレーパークの活動に市が保険料・場所代について負担してくれるようになった。

国や自治体が積極的にプレーパークを事業として取り組んでほしい。

**音なぎ(司会)** 人の確保については？

**E氏** 子ども教室13年目、コーディネーター3代目として活動している。3年ぶりに校内キャンプをやった。市内にある大学でスタンプラリーを行い、学生のボランティアが手伝ってくれた。若い力を取り込むことが大切だと思う。

**音なぎ(司会)** 大人がいくら居場所だよと言っても、子どもが居場所と感じなければ意味がない。大人の向き合い方について最後にパネリストの皆さんからお願いしたい。



**藤原氏** 大人がどんな眼差しで子どもたちを見るのか、どんな空気がそこにあるのかということが大事で、そういうところに子どもも居心地の良さを感じると思う。みなさんも自分の家の前でも小さな居場所を作ることができると思う。その小さな居場所が近所につかできると居場所も広がって、近所の子どもたちを幸せにできると思う。

**飯笹氏** まずは大人がつながりを深めてほしい。大人が仲良くつながっている姿を見せると、子どもはよく見ているので、子ども自身もつながろうとする。また子どもから教えられることもある。子どもが作った標語に「いいところ探すと君を好きになる」というのがある。人とつながろうとすると上手くいかないこともあるが、子どもたちもいいところを探してがんばっている。大人同士もいいところ探してつながっていけば、子どもたちも人とつながりながら自立していくと思うし、心の居場所にもなると思う。それが最終的には子どもにとって大好きなふるさとになると思う。

**蓮見氏** 居場所づくりに大学生をぜひ巻き込んでほしい。自然の家でも登録をして活躍している大学生がたくさんいる。大学生はきっかけがあると目覚める。

また、体験活動を仕事とするという会場からの意見があった。賛成だが難しいところもある。体験にお金をかけることもずいぶん当たり前になってきているところもあるが、それができない家庭もある。そういう家庭に対しては行政がやるべきだろうと思う。

自然の家ではみなさんの活動を応援している。力になれることもあるので何かあればぜひ相談してほしい。

#### 総評

**浦川氏** 自分の存在を受け入れてくれる「居場所の必要性」と青少年が抱える様々な課題解決への一つのアプローチとして「体験の重要性」を問い、「大人の向き合い方」を考えるとという真正面から向き合ったフォーラムになった。

「居場所の必要性」について。

最近、「親との接触や信頼関係づくりが難しいという支援者が90%もいる」と聞く。どうして人との関係づくりがこんなに難しくなったのか。

幼少期の愛着形成の不安定さによって社会に出てからも様々な困難を抱えてしまってい

る現象が、人との関係づくりを難しくしてしまっているようだ。

安らげる場所、励ましてくれる人、そして人とつながれる場所、こんな場所を地域に提供することが緊急の課題だと思う。



浦川氏

「体験の重要性」について。

体験には、自然体験、生活体験、社会体験がある。

人は、教えられないことは一生知らないし、やったことがないことは一生できない。社会で生きていく上で必修単位の学びの機会を奪われた子どもたちの苦しみが聞こえてくるよう。行政と私たち民間団体が地域の力を結集して、子どもが成長する過程で様々な体験をさせないと子どもが力を失っていく。すでにその兆候が見え始めている。

今後の課題と対策。

子どもは親からも地域からも愛されて育てば、安心して心を開きコミュニケーション力も高くなる。声かけと激励は漢方薬のようにじわっと効いてくる。ココロねっこ運動の継続が必要なのはそのため。

最後に、今年の6月に児童福祉法の改正、こども家庭庁設置法、こども基本法が制定され、今後こどもを真ん中にした施策が推進されると期待している。行政と民間資源、地域資源と一体となった支援体制が充実してくればまち全体が居場所になるように進むかもしれない。